

大学出版

2001.12 No.51



能楽の四季——冬 ■ 中西通 ——表 2

特集 * 学術書の未来へ

学術出版と著作権の今後 ■ 金原優 —— 2

これからの学術書編集 ■ 西谷能英 —— 6

学術書電子書籍Ebook出版の動向

新しい本のかたちを創り出す試み ■ 山本俊明 —— 10

助成出版と大学出版部

科研費補助金の分析を中心に ■ 小野利家 —— 14

科学する目 4 動物の速さ ■ 青木淳一 —— 18

歩く・見る・聞く 24 上海「大韓民国臨時政府旧址」博物館 —— 20

大学出版部ニュース —— 22

製作の現場から 26 —— 32

デジタル出版最前線 4 —— 表 3

大学と社会を結ぶ知のネットワーク



大学出版部協会

中西 通 (能楽資料館 館長)

雪の舞



能楽資料館の秘蔵の能面の一つに、赤鶴一透（しやくわくいちとう）所作の「小面」がある。作者赤鶴は古文書によれば弘安年中の人といわれ、鬼の面の上手、いいかえれば強い表情の面を得意とした作者であった。女性の、とくに若い女性の面が残されているのは、他にほとんど例がない。

この小面はもともと金春家のものであったらしく、面裏に金春家三代、竹田七郎の名が刻まれている。その後時代の変化のなかで、現在は私の手許にある。現存する「小面」中の逸品である。

他方、金剛流の宗家とは、先年伝来の能面集『金剛家の面』の編集・構成を担当したこともあってたいへん親しくさせていただいて

いるが、その能面集の制作中から、赤鶴作の小面をなんとか舞台で使ってみたいもののだということが再三にわたって話題となっていた。

今年の九月八日、丹波篠山における年中行事「丹波夜能」でそれが実現することになった。演目は「雪」、シテはもちろん金剛流金剛永謹宗家である。「雪」は金剛流にのみ伝わる。旅の僧が雪の精に逢い、その迷いを晴らすという物語的展開は単略なものであるが、月の下袖を翻して舞う「序の舞」の美しさは格別であった。古い面、とくに室町時代のものを舞台に提供するときは、相当な覚悟を必要とするが、舞姿の美しさと神々しいまでの「小面」のもつ力に、私は終始呆然としていた。素晴らしい舞台であった。

*

この丹波夜能が終わると篠山の秋は早い。日本中どこでもそうだが秋祭りのシーズンとなる。能楽殿のある春日神社も、秋の例祭である。京風の山鉦が九基、神興四基、太鼓御輿八基、田舎にしては華麗、勇壮な祭の巡幸絵巻である。子どもはもちろん、大人もそわそわする。家々の献燈丁灯が情緒をかます。

やがて秋が深まって年の瀬が訪れると、もう「翁の神事」新しい年を迎える。考えると私は年中お能の世話で過ごしているようだ。

特集

学術書の未来へ

学術専門書・雑誌は、もともと限られた研究分野の限られた読者のためにつくられるものであり、初めから本の刊行の成立自体が難しいジャンルといえます。それに加えて、出版界全体が五年連続のマイナス成長を決定づけられた現状にあります。

学術専門出版社が今後とも良書を発行しつづけるためには、状況を打破するさまざまな戦略を駆使していかねればなりません。

逆境においても、打開策を次々に考え、打ち出していく人たちがいます。今回はそれらの言葉に耳を傾けてみましょう。

学術専門書の存在を脅かす、行き過ぎた複写利用問題への対処法。編集者のスキルアップや生産性の向上を実現するパソコン機能のフル活用。インターネットの特性を利用したEbookという新しい媒体の可能性。学術専門書を継続的に刊行していくうえで重要な役割を果たす出版助成制度の改革への提言。

これらの切り口から、生き残りをかける学術専門書の未来について考えてみたいと思います。

学術出版と著作権の今後

金原 優 (医学書院代表取締役社長)

学術専門書は大学出版部のような教育機関を基盤とする出版会、研究者の組織である学会あるいは協会、ならびに会社組織としての出版社等によって出版されている。これらの学術専門書、とりわけ学術専門雑誌の目的は研究者に必要な情報を提供することであり、同時に研究者にとってはその成果を発表する場でもある。多くの学術専門雑誌が発行され、利用されることによって日本の学術研究のレベルは上がり、これらの専門雑誌の果たす役割は高く評価されることになる。

学術文献の複写利用

学術専門雑誌を含めたすべての出版物は、本来印刷・製本された形態で読者に利用されることが基本であるが、学術専門雑誌の性格上、複写利用されることも少なくない。学術専門雑誌は最初から最後まで読み通すというものではなく、それぞれの研究テーマを求めて文献単位で利用され

る性格を持っている。近年は学術文献のデータベースも整備されており、どういった文献がどこに掲載されているかを瞬時に検索することが可能になってきた。目指す文献の所在が確認されれば、それは必ずしもその文献が掲載されている雑誌を入手しなくても、文献単位、つまり複写物の形で入手できれば用は足りると考えられるものである。学術専門雑誌それ自体も増大しており、それが果たす学術的役割を考慮すると学術文献の複写利用は必ずしも否定されるべきものではないと考えられる。

著作権法第三〇条は、個人的に又は家庭内その他これに準ずる限られた範囲において利用する場合にはその利用するものが複写することを認めており、著作権法第二一条は、政令で定められた図書館等においては利用者の求めに応じて図書館等の資料の一部分を一人について一部複写提供することを認めている。しかし出版物の複写は基本的に著作権者のみに与えられている権利であり、これらの著作権法

における複写規定は、それぞれの場合において明記されている条件に合致する場合に限り、例外的に著作権者の権利を制限しているものと解釈すべきである。

前出の学術文献の複写利用にあたっては、これらの著作権法における例外的な権利制限規定に合致していれば法律の枠内として無許諾・無報酬で複写利用できる、あるいは複写物が入手できることになる。しかし、だからといって研究目的であれば、学術文献をすべて無許諾・無報酬で複写利用できると考えるのは大きな間違いである。

医学、理工学といった自然科学系の学術専門雑誌は大量に複写利用されているが、その実態を正確に把握することは困難である。学術専門雑誌については、必要とされる学術文献を有料で頒布するいわゆるドキュメント・サブライヤーと呼ばれる業者が多く存在し、一定の手数料を支払えば、必要な文献が郵送されてくるサービスが定着している。科学技術の振興のために文献検索と情報の提供、文献の複写は文部科学省所管の特殊法人である科学技術振興事業団で積極的に行われている。また、政令で定める図書館等における文献複写は著作権法第三一条の枠内として合法であるとしても、複写物の館外への送付は昭和五九（一九八四）年の文化庁の報告書でも「このような実態を適法と解釈するには問題がある」としており、違法とはいえないまでも必ずしも合法ともいえないという要素がある。このような学術専門雑誌の文献複写は少なくとも年間数百万件ある

だろうといわれている。一件を雑誌一文獻と計算しているから頁数に換算すると数千万頁にもなる。

これらの複写以外にも、民間の企業や研究所、あるいは教育機関においても前出の著作権法に合致しない複写は多く存在するものと考えられる。企業では、特に研究部門や開発部門などでは、会議資料として、あるいは社内の他部門への資料送付の目的で、著作権法の規定を意識せずに社内の文献をコピーしているであろう。研究機関においてもそれぞれ所有あるいは購読している学術専門雑誌を研究目的で複写することはよくあるであろうが、それらの複写が著作権法の規定の範囲内であるかどうかはあまり意識しないで行っているというのが実態であろう。

日本複写権センターの設立

このように、多くの学術文献は複写物の形で利用されているが、著作権法の規定に該当しない複写については本来は必要な権利処理と然るべき複写使用料の支払を行わなければならない。ちょうど一〇年前に、出版界が組織する出版者著作権協議会（出著協）、学会・協会が組織する学術著作権協会（学著協）、それに著作者、写真家等の団体が組織する著作者団体連合（著団連）の三団体によって設立された日本複写権センター（JRRCC）はこの目的のもとに運営されるはずであった。JRRCCにおける複写許諾単価は基本的に一頁二円である。許諾の方式には複写のつど

許諾を与え、使用料を徴収する個別許諾契約と、一定の範囲で複写の実態に応じた使用料を算定した上で許諾を与え使用料を徴収する包括許諾契約の二種類があり、包括許諾契約は、さらにその使用料算定の方法によって、実額方式、定額調査方式、定額簡易方式の三種類に分かれている。前出の一頁二円の基本単価はこのすべての方式に適用されるが、現在のJRRRCが複写利用者と交わしている契約のほとんどは包括許諾契約の定額簡易方式によるものであり、この方式における計算方式は、一頁二円の基本単価に社員一人当たりの年間の予想複写枚数二〇枚を乗じたもの、つまり社員一人当たり年間四〇〇円を基本にして、それに社員数を掛けたものが年間の複写使用料となる。JRRRCは現在約三千五百の企業と複写利用契約を行っており、年間の複写使用料収入は約一億六千万円となっている。

一方、この一頁二円の基本単価を妥当とは考えない、つまり二円では安すぎると考える出版社に対して、JRRRCはいわゆる「白抜きR」と呼ばれる出版社が決めた単価で許諾を与える方式を制度化していた。しかしこの「白抜きR」の許諾要請は年間数十件程度で、年間の使用料収入も数千円から数万円程度と実質的には機能していなかった。そのため出著協はJRRRCに対して一九九九年一〇月に要望書を提出し、「白抜きR」の周知徹底とその許諾業務を積極的にを行うこと等を申し入れた。

JRRRCはその後の検討のなかで、「白抜きR」は本来

の業務ではないという疑問が出され、最終的に二〇〇〇年一月二十六日、今後は「白抜きR」の取り扱いをJRRRCでは行わない、という決定を下した。その結果、同日をもって「白抜きR」のJRRRC委託が解除となった。

日本著作出版権管理システムの設立

宙に浮いてしまった学術専門雑誌の複写許諾業務を処理するために、日本著作出版権管理システム（JCCLS）が二〇〇一年一月に設立された。JCCLSはJRRRCの許諾が適切に機能しなかったという教訓を生かし、すべての委託について委託出版社が許諾単価を指定して委託する方式を採用している。出版物は定価がそれぞれ異なり、頁当たりの単価もさまざま。目的用途もそれぞれ異なり、複写の対象になるものならないものもそれぞれ多様。そういったさまざまな出版物の複写にかかる許諾単価が均一であることは不自然である。増大する多様な出版物の複写利用に対応し、しかるべき複写使用料を徴収するためにはこの方式が最も適切であると考ええる。

現在JCCLSは委託出版社との委託契約を行い、委託リストの提出を受けつけているが、一定の委託契約が進んだところで複写利用者との複写利用契約を開始し、複写利用料の徴収を開始する予定である。徴収した複写使用料は一定の手数料を控除した後、委託出版社に対して、複写利用の実態に応じて配分する予定である。

学術文献における著作権処理の今後

以上のようにJCLSは現在利用者側との話し合いによって、明らかに著作権法の枠外と判断される複写利用について許諾業務と使用料の徴収を開始することになっている。しかし個々の複写実態はさらに複雑であり、現在の著作権法の解釈も明確でないところが多々存在する。現在文化庁で行われている文化審議会著作権分科会情報小委員会では、時代の変遷とともに変化するさまざまな複写利用に対応するための著作権法改正に取り組んでいるが、それと並行して法律の解釈が明確でないところ、あるいは時代に即して実務上の取扱いの変更が必要などところについては権利者と利用者双方による協議によって合意に達する点があるかどうかの検討に入っている。その協議によっては、これまで著作権法の後ろ盾がなく、何の対応もできなかった複写利用についても必要な権利処理が可能になることも出てくるであろう。

こういったこと背景には、学術専門雑誌については複写利用が避けられないという純粋学術研究上の必要性と、実際に市場に出回る専門雑誌の販売量との比較でかなりの量となる複写利用の実態を出版者と利用者双方が十分把握しているということがあげられるであろう。学術専門雑誌はそもそも学術研究者に読んでいただかなければならない出版物である。そういった出版物がその主たる市場において研究目的という大命題のもとに研究者に複写利用されて

しまい、その利用にあたって何の権利処理も使用料の支払も行われないうことになってしまうと、学術専門雑誌の発行そのものが不可能になってしまう。学術専門雑誌の発行者が大学出版部であっても学会であっても、また商業出版社であったとしても事情はまったく同じである。読者に有料で利用していただかなければ出版にかかる経費が捻出できないのである。

今後、学術専門雑誌が継続して発行されるためには、複写利用にかかる適切な許諾システムが機能し、複写使用料の支払が公平に行われなければならない。欧米ではすでにそのことに対する制度が確立されており、学術専門雑誌の複写利用が適切に行われている。日本においても今後、学術文献は複写利用の必要性と頻度が高いということを出版者側も認識し、一定の複写利用についても便宜を図り、利用者側においても、著作権法を逸脱する場合はもちろんであるが、それ以外の場合においても利用の実態が出版者の正当な利益を侵害し、学術専門雑誌の継続発行を阻害する可能性の高い複写利用については、出版者側と十分な話し合いによって必要な権利処理を行うことが必要であろう。それが学術専門書出版の意義と必要性をさらに高め、最終的には日本の学術文化の発展に寄与するものとなるだろう。学術専門書の出版者と学術研究者は今後も密接な関係を保ち、著作権を尊重しながら双方の立場を理解しつつ、学術出版の今後を考えていかなければならない。

これからの学術書編集

西谷能英

(未来社代表取締役社長)

この四月に『出版のためのテキスト実践技法／執筆篇』という主として専門書出版にかかわる編集マニュアル本を刊行したことがきっかけになって、いろいろな人や本との出合いがあり、またいくつかのセミナーの講師をつとめさせてもらった。なかでも七月におこなわれた大学出版部協会の拡大編集部会は、学術書の編集にたずさわっている現在の編集者の集まりだということもあって、自分としてももっとも手ごたえのあったセミナーだったと思う。

出版がこれからいっただいどうなっていくのかまったく先が見えないなかで、学術専門書の出版もまた展望をもちにくい時代にはいっている。未来社のような専門書志向の小出版社にとつてのみならず、大学出版部のような学術出版をいわば義務づけられている特殊な企業体にとつても、ますます売れなくなっている学術書を企画・編集・出版するということはどういうことか、それこそ真剣に問い直さなければならなくなっている。しかし現実はなかなか厳しく、

残念ながらこれで安泰といった処方箋などもちあわせていないことはあらかじめ言っておかなければならない。

専門書出版の未来像

とはいえ、これからの専門書出版には、従来とはちがったかたちではあるが、まだまだ十分な可能性が残されていると思う。それにはいくつかの理由が挙げられる。

そのひとつは、どんなに本が売れなくなってきたとは言っても、学問や芸術が人間の本源的欲求の現われであり、しかもそれらが書物という形態をとって残され、伝達され、また享受されようとするかぎりにおいて、かならず優れた著者と読者は存在すると確信しうるからである。もちろん、読書環境や出版環境も必然的に変質せざるをえないから、これまでとまったく同じように企画・編集・出版がなされるという保証はない。しかし単純に考えて、出版業界の縮小はありえても出版の原点である著者の存在は衰退してい

くとはいまのところ思えない。

もうひとつの理由としては、パソコンとインターネットによる技術情報革命の進行がこれまでの出版の業態を変質させようとしているのは事実としても、ある意味ではこれらの技術と情報の力を戦略的にとりこむことによって専門書出版は新しい局面を切り開くことができるのではないかと、ということである。パソコンとインターネットというのはたしかに諸刃の剣であって、書籍離れの直接的な原因のひとつと考えられるが、逆にこれらを積極的にとりこむことによってこれまで考えられなかったスケールで出版という業態を革新しうる武器にもなりうるのである。

出版業はこれまで大出版社、大取次、大書店を核とする大量生産―大量流通―大量販売によって右肩上がりの上昇をつづけ、「不況に強い出版界」なる神話さえつくりあげてきた。その神話がもろくも崩れ落ちようとしているのが昨今の出版不況であるが、これは本来、出版それ自体の不況を意味するのではなく、これまでの出版界が依拠してきた経済構造の金属疲労が全般的な経済不況に追い打ちをかけたこと、ここへきて露出してきたこともかかわっている。専門書出版に見られるように、出版という業態はもともとそんなに景気のいい業種ではない。どちらかと言えば地道な業種たる出版業がなにを勘違いしたのか、花形産業の顔をしていたのが間違이었다のである。いままら、出版業界全体で三菱自動車の年間売上げはクリアしたもののホン

ダの売上げにも及ばないのだと、そんなことに気がついたって遅いのである。

そういう意味では専門書出版の世界にはなにも悲観することはない。むしろ出版の原点にたちもどって自分たちがなにをほんとうにやりたいのか考え直せばいいのだ。そう考えてみると、パソコンとインターネットの可能性にあらためて注目してみる必要がある。

インターネット利用の可能性

ここは専門書出版の未来像、またはそのなかにおける編集者のありかたを考えるべき場所だからあまりくわしくは論じられないが、専門書出版社にとってインターネットの可能性はもっと考えられていいと思う。

ひとつは出版社のホームページをもっと活用すること。

ここからの書籍注文はまだまだ少ないが、いずれ急速に伸びていくことはおおいに期待できる。わざわざ出版社のホームページにまで注文しにくてくれる読者はまだ少ないにせよ、オンライン書店その他をつうじてネット注文の量は確実に増加している。大手出版社の間はネット注文を軽視しているところがあるが、それはかれらの商品が巻の書店に氾濫している度合が高いからであり、しかも内容から言ってネット注文しようとするような読者の吟味に相対的に耐えられないものが多いからである。

裏をかえせば、専門書出版社ほどネット注文でのチャン

スが高いということである。書店在庫が少ないし、宣伝力や営業力もないから、内容がなくても売れるということはないかわりに、専門的で定価の高い本でもしっかりと情報をあげておけば、読者はかならずや検索し注文に結びつくという可能性があるとことである。おもしろいことに大手出版社のベストセラー本（ところで、いまそんなものがあるかな？）でも小零細出版社の高い専門書であっても、書店店頭での扱いは裏腹に、インターネットではまったく同格に位置づけられるのである。アクセスされる可能性は理論的にはまったく五分五分である。しかもインターネットを日常的に利用しているような人は専門家のウェイトが高いから、この関係はひょっとしたら逆になっているかもしれない。こうした情報価値の相対化や逆転がなされてしまうところにインターネット利用の可能性があるのである。わたしはこれをひそかに「インターネット民主主義」と名づけているが、専門書出版社にとってのインターネットのあらたな可能性はこのあたりにもあるのである。

さらには、あとで言うつもりのことと関係するが、これからはインターネットをつうじてのデジタルコンテンツの販売という問題が課題になってくるとわたしは予想している。なぜなら専門家ほど書籍以外にもデータとしてコンテンツを必要とする時代がくるにちがいないからである。課金制の問題と若干の技術上の問題さえクリアされれば、いまでもテキストファイルまたはPDFファイルでのコンテ

ンツ販売は可能であり、これからの専門書出版社の選択肢のひとつとして浮上してくるはずの問題だからである。

編集者はなにをなすべきか

本題にはいろいろ。わたしの考えていることはすでに『執筆篇』で述べているし、いま『週刊読書人』と未来社ホームページで書いている続篇の『編集篇』その他でも触れているが、あえてくりかえせば、これからの編集者はパソコンの編集機能をフルに引き出して単純でむだな作業はなるべくパソコン上ですませてしまい、本来の企画案出、原稿読み、著者への提言といった編集業務に集中できる環境をととのえるべきである、ということに尽きる。

わたしはパソコンで編集の仕事がすべてできるなどと言ったことは一度もないし考えたこともないが、『出版のためのテキスト実践技法／執筆篇』を刊行してあらためてわかったことは、出版業界というところは、印刷などの関連業界のひとつもふくめて自己中心主義のひとがきわめて多い、かなり変なひとたちの集まりだということである。『執筆篇』はあまりパソコンに精通していない数多くの著者や編集者のための入門篇として書いたものであり、これにつづく『編集篇』でこれまでの編集上の経験や工夫を公表するつもりであるが、未刊のものにまで文句をつける乱暴な書評や、なにをいままさらこの程度のものを、といった冷笑のたぐいに事欠かないのである。もちろん、正当に評価して

くれるひとのほうが多いのがわたしの励みになっているが、どうして編集とパソコンという関係を論ずると無意味な反発や抵抗が大きいのだろうか。パソコンなんかで編集ができるか、パソコンをやっているヒマがあったら企画のひとつでも考える、というおきまりのパターンである。

しかし、わたしに言わせれば、これはパソコンのすぐれた機能を引き出し編集という場面に適用するすべを知らないだけの話である。個人ユーザのレベルで本格的にパソコンが現われてまだせいぜい十数年という時間を考えてみれば無理もないところもあるが、実際に執筆や編集という作業にパソコンを有効に生かすための適切なマニュアル書がわたしの知るかぎり一冊もなかったことも原因のひとつなのである。『執筆篇』と『編集篇』はその意味で、必要にせまられての、わたしなりの経験を生かした業界へむけた提言なのである。

ここで前宣伝めくが、『編集篇』でやろうとしていることを述べておきたい。実際の編集作業においては用字用語の統一をはじめ、文字データを適切なかたちに配置するという技術上の問題がさまざまにあり、通常はゲラになってから赤字を入れて修正をくりかえすという作業がかなりのウェイトを占める。原稿やゲラの通読においてもこうした修正や統一に気をとられながらの作業ということになり、間違いや見落としの原因になりかねない。逆に言えば、むだなところに神経を配りながらの通読という作業はいちじ

るしく集中を欠き、非効率なのである。わたしもかつてはこうした方法で仕事をせざるをえなかったために読んだつもりの内容がすっかり抜けてしまい、細部のつまらない字句へのこだわりばかりが残ってしまうというような失敗をくりかえしてきた。これはわたしだけの現象ではないというの、わたしなりの方法探しの出発点だったのである。

わたしが『編集篇』でやろうとしているのは、ひとこと例えば、SEDというUNIX系のすぐれた検索と置換のためのコマンドをフルに利用して、あらかじめ作成してあるスクリプト（一種のフィルター）にかけて原稿の一般的な問題を事前に処理してしまうことであり、印刷所入稿のために自動処理で組版がなされるためにタグと呼ばれる割付け指定を原稿のファイルに埋め込むという作業である。とは言っても、こうした一括処理はほとんど瞬時になされることができ、しかも人間の目では追いきれないところまで検索と置換をしてくれるので、あとの編集作業がきわめてスピーディかつ快適になるとともに、本来の編集作業に集中できる環境をつくることができるということなのである。こういう作業環境はパソコンが多少でも利用できるスク립トでも実現できるし、そのためのツールや再利用してもらおうという予定なのである。問題は、そこまでやっても、どれだけ編集者が自分の問題としてとらえかえてくれるか、というこの一点のみである。

学術書電子書籍Ebook出版の動向 新しい本のかたちを創り出す試み

山本俊明

(大学出版部協会副幹事長・聖学院大学出版会)

インターネットと学術出版

インターネットが日本でも普及しはじめたところから、大学出版部協会編集部では、「学術専門書出版とインターネット」などの主題で研修会を開き、インターネットを通して学術書出版の可能性を議論してきた。インターネットによって出版すれば、印刷代、用紙代などがかからず製作費は削減できる、流通経費をかけず読者に直接情報を届けられる、本を置く倉庫も要らない、大学出版部には理想の出版方法である、と考えられた。しかし実際に電子出版の取り組みが始められたのは、学術書出版社ではなく、大手出版社、印刷会社などの「電子書籍コンソーシアム」であり、現在では集英社ほかが運営する「電子文庫パブリ」などである。だがこれらの電子書籍のコンテンツはほとんどがコミックやエンターテインメント小説である。その他、研究者が個人的にオンライン出版を始めた例はあるが、出版社がインターネットの特性を利用した学術書の電子書籍

を出版する動きはまだ現れていない、といえるだろう。

むしろインターネットで流される学術情報は、レフリーの審査を経たおらず、また紙の本のように出版するにあたっての選択という「評価」も書籍としての「付加価値」をつける編集作業もないもので、学術的価値は低いという見方が支配的である。また、著者と読者を結びつけるインターネット環境で、その間に位置する出版社の役割はどのようになるのか、編集者はどう関わるのか、学術情報の価格設定は何を基準にするのかなど、まだビジネスモデルを見出せず、資金的・技術的準備もなく時期尚早という見方が一般的ではないだろうか。

しかし、インターネットは学術情報を、それを必要とする人だけに届けることができる有効なメディアである。とくに大学出版部が、小部数多品種の学術書を出版していくためには、インターネットによる出版の可能性をさまざまな角度から検討していく必要があるのではないかと思う。

東アジアの大学出版部における電子書籍出版の動向

今年の九月五日に上海外国語大学を会場に開催された第五回日本・中国・韓国大学出版部協会合同セミナーの主題は、「インターネット出版と伝統的出版」であった。急速に進展するインターネット環境において、大学出版部はどのような出版活動をしていくかがそれぞれの国から報告され、議論された。

中国・韓国においても現在、電子書籍が出版されている点は、日本と同じように小説や評論などの分野である。日本と異なるのは、韓国では、昨年、商業出版社が電子書籍会社と電子書籍協会というコンソーシアムを形成したが、いくつかの大学出版部にも加盟が打診されたことである。

電子書籍会社から提示された条件は、著作権は電子書籍会社が保有し、売上収益の六〇％を大学出版部が四〇％を電子書籍協会が得るというものである（出版部が著者に印税を払うので、実際は二〇／三〇％）。その時点では、電子書籍協会に加盟することが見送られたが、その後も大学出版部の多くは、電子書籍の出版については、「観望の姿勢」にあるという。しかし、今年になって電子書籍の規格が統一され、韓国学術図書出版協会加盟のいくつかの出版社が共同でウェブサイトを開設し、電子書籍を出版することを決定した。電子書籍化の大きな流れの中で大学出版部も具体的な検討を始めている。

中国は、市場経済体制のもとで、大学出版部間の競争が

激化し、学術書出版の経営状況が悪化していることもあるが、電子書籍への関心は、むしろ出版の流通機構が十分に発達していないことと、紙資源の不足という問題から生まれているようである。最近では著作権を保護し、コピーを防ぐ電子書籍用のプログラムが開発され、大学出版部のいくつかは電子情報会社にデータを渡し、図書館などへの販売が積極的に検討されている。

日本を除く東アジアの大学出版部においては、中国では二〇〇二年から電子書籍を出版しはじめる勢いがあるし、韓国もそれに続くであろう。ただ、電子書籍とはどのような形態のものか（紙の本をデジタル化しただけのものなのか）、価格はどのように設定するのか、などビジネスモデルはまだ見えていない段階にあると思う。

アメリカにおける学術書電子書籍の動向

インターネットの発祥の地アメリカでは、学術書の電子書籍の出版がすでに始められている。MIT出版部では六年前からインターネットで書籍のデジタルデータを無料で提供しているし、大学出版部協会に加盟しているナショナル・アカデミー出版部では、やはり無料で二〇〇〇点ほどの電子書籍を出版している。一方、数年前から商業電子出版社によって電子書籍の出版が事業として始められている。現在では「電子書籍のゴールドラッシュ」といわれるほど、数多くの商業電子出版社が設立され、大学出版部など

の出版社からデジタルデータの著作権を買い求め、電子書籍・雑誌・論文を出版している。学術書を中心に販売しているのが、ネットライブラリ (NetLibrary)、クエストイア (Questia)、イーブラリ (Ebrary) などの出版社である。それぞれ三万から四万点の研究書のバックリストを持ち、図書館あるいは個人に電子書籍として販売している。たとえばネットライブラリは全米で五〇〇〇以上の図書館に電子書籍を配本しているが、最近、カリフォルニア大学と契約し、図書館を通して、研究者、学生に電子書籍を配信し始めた。利用者はコンピュータにダウンロードし、電子書籍特有の全文書の検索機能、強調機能、書き込み機能などを利用して、「紙の本」と同じように講読できる。

しかし、電子書籍を導入した大学のレポートによれば、まだ紙の本のほうが使いやすいという結論になるという。コンピュータ画面では読みにくく三〇頁以上は読めない、突然データが消えることがある、スクロールして読むのに時間がかかるなどの問題である。これらの問題は技術的に改善されていくであろうが、それ以上に懸念されているのが、ベンチャービジネスとしてここ数年の間に設立されたこれらの商業出版社の経営的不安定さである。

また商業電子出版社の主導による電子書籍の形態は、ほとんどが既存の本のデータを単にデジタル化したものである。インターネットの特性を生かした「新しい本」を生み出すまでにいたっていない。

アメリカ大学出版部協会の今年度総会では、「電子書籍の配本システムは不安定であり、市場はまだ未成熟である。価格のつけ方、読者がどのような電子書籍を求めているのか、まだ明らかではない」という報告もされた。

商業電子出版の急成長に対して、学術専門書を出版してきたアメリカ大学出版部は、データの提供など協力はしながらも冷静にその動向を見極めようとしているようである。

学術書E-storyBookプロジェクト

それでは質の高い学術情報を提供し、しかもインターネットの特性を生かした「紙の本に代わる新しい本」とはどのようなものであろうか。

そういう意味で注目されるのが、アメリカ学術会議が、アメリカ大学出版部協会、五つの歴史関係の学会と共同のプロジェクトとして歴史学分野の学術書E-bookを出版する準備を進めていることである。このプロジェクトの目的は、第一に「歴史学分野で、質の高い学術書E-bookを出版し、E-bookが学会で幅広く受け入れられる環境を作り出すこと」である。アメリカでもインターネットに流された学術論文は、大学の終身在職権を得るための業績にならないし、昇任の審査対象にもされない。このプロジェクトでは、学会で指導的立場の研究者、大学出版部の編集者、図書館司書などが構成する審査委員会が、まず原稿の厳密な審査を実施し、大学出版部の編集者が編集に携わり、出

版の質を高める仕組みを作っている。

計画では、参加している大学出版部の既刊書で評価の高い書籍を五〇〇点選考し、Ebookにする。また八五点のEbookの新刊書を発行する。Ebookの作成は大学出版部とデジタル・ライブラリ・プロダクション・サービス(DLPS)が担う。HistoryEbookのウェブサイトを(www.HistoryEbook.com)を通して契約した大学図書館などに届ける。図書館は規模によるが、年間三〇〇ドルから、一五〇〇ドルの料金を払う。読者は、キャンパスのネットを通して自宅でもダウンロードできる。またCD-ROMやDVDを受け取るほか大学出版部から印刷された本で買うこともできる。つまりこのプロジェクトではさまざまな形態で学術情報を受け取ることができるのである。

新しい本のかたちを創り出す

このHistoryEbookの特徴は、インターネットが持っているさまざまな可能性、マルチメディア機能を使った新しい「本」のかたちを創り出そうとしていることである。まだ出版されていないが、最初のEbookの著者となるアメリカ歴史学会の前会長で、プリンストン大学歴史学部教授、ロバート・ダントンによれば、単にテキストをデジタル化するだけでなく、新しい学術研究の方法による新しい本のかたちを追求するという。Ebookはピラミッドのイメージで説明すると五つか六つの層によって構成される。一

番上の層は、概説的な内容、第二層は、注、第三層は原資料、そして第四層は方法論など学問的議論、第五層は、授業にその内容を利用したシラバス、第六層には、批評、編集者とのやり取り、読者からの手紙などを載せる。読者は第一層で概説的知識を得られるが、関心に従って、ハイパーリンクをたどり、さらに深められた議論を参照したり、クリックし地図や表、歌などを引き出すことができる。

テキストだけでなく、マルチメディア機能を用いて映像や音響も取り入れるアイデアは、よく知られているが、それを学術書Ebookで実現し、これまでの「紙の本」とは別の「本」を創り出そうとしているのである。

また原資料を読者に提供することによって、学問的検証のプロセスに参加を促すという。ダントンは「歴史研究者は多くの人に歴史資料の豊かさに直接触れてほしいのである。研究者の解釈を通して資料に触れるのではなく、読者が直接、資料を読み、解釈し、研究に参加してほしい」といっている。これまで、学術情報は研究者から読者への一方通行であったが、読者へも参加を呼びかけ、読者からの応答も取り入れながら双方で研究を進めていく。Ebookがその媒体となるのである。インターネットの特性を利用した新しい学術研究の方法の中から新しい本のかたちが生み出されようとしている。電子書籍がすぐに「紙の本」に取って代わることはないであろうが、この新しい本のかたちに注目する必要があるのではないだろうか。

助成出版と大学出版部 科研費補助金の分析を中心に

小野利家 (京都大学学術出版会)

はじめに

経済不況の拡大は出版業界にも深刻な打撃を与えつつある。出版販売額の規模は十年前の一九九二年度のレベルまで縮小したといわれる。とりわけ、われわれ大学出版部の中核となる専門書・学術図書の分野は、市場規模が小さいゆえに目立った数値が報告されることは少ないが、たとえば返品率の漸増にみられるように明らかにボディブローは効いてきているのである。

そうしたなかで、大学出版部が不調に陥っているといった声を聞かないのはまことに幸いというほかない。むしろ、新たな出版部創設の希望が多いという。これは、その意図するところはさまざまであろうが、大学当局の庇護など何らかの助成を前提としてはじめて構想自体が成り立っているものと思われる。じっさい、大学出版部と助成出版の関係は密接不可分の関係にある。現在の協会所属の大学出版部でも、ごく一部の特殊な例を除いて大半が助成金を得て

の出版をおこなっている。以下にレポートするのは、われわれ大学出版部における助成出版の実態を、主として文部科学省科学研究費補助金・成果公開促進費「学術図書」(以下、「科研費出版助成」と略す)の歴史的推移などを中心に分析し、そこから予見できる助成出版と大学出版部のあり方などについて若干の提言を試みたい。ここで、あえて科研費出版助成に注目するのも、現下の経済状況では、残念ながら民間の財団等による出版助成には大きな期待をよせることは当面困難になっている一方、科研費出版助成はいまのところ順調に推移しており、相対的に大きな意味をもちつつあるように思われてきたからである。

以下、本レポートでは、主に科研費出版助成については『文部省科学研究費補助金採択課題・公募審査要覧』(各年度版)、大学出版部の助成出版の実態については本年七月下旬に実施したアンケート調査の資料を使用したことをあらかじめお断りしておく。

図表④ 科研費と研究成果公開促進費の推移

(単位千円)

	科研費 (新規・継続)	研究成果公開 促進費(比)
1981(昭和56)	31,234,900	730,810(2.3%)
1985(昭和60)	35,806,230	757,680(2.1%)
1990(平成02)	50,561,910	1,198,470(2.4%)
1995(平成07)	74,254,580	2,132,260(2.9%)
2000(平成12)	98,628,500	2,604,800(2.6%)

図表⑤ 研究成果公開促進費の配分推移

(単位千円)

	定期 刊行物	学術 図書	二次刊行物・ データベース
1981(昭和56)	443,090	164,130	123,590
1985(昭和60)	495,110	145,830	116,740
1990(平成02)	529,020	316,860	352,590
1995(平成07)	679,960	571,700	880,600
2000(平成12)	750,600	626,600	1,227,600

科研費出版助成の推移
 科研費出版助成は戦後すぐの昭和二十二年(一九四七)年の「学会誌出版補助金」により制度化されたといわれる。その後、「研究成果刊行費」(昭和四十年)、「研究成果公開促進費」(昭和六十一年)と呼称を変えて今日にいたっている。この名称の変更は、科研費による研究成果公開補助金の中身の变化をそのまま反映しているといえる。制度発足当時は、学会誌・学術定期刊行物が主流であった。その後、単行の一般学術図書部門が充実するにつれて事実上「刊行物」というかたちで一本化され、さらに近年になってデータベース等の電子化による成果公開が急伸するにおよび、それらをも包括する名称に改変されたのである。

それぞれ三部門の配分額(交付決定時点)の、近年二十年間の大まかな推移をみたのが図表⑥である。また、これに対応する科研費全体(ただし地域推進研究費、特別研究奨励費、間接経費等を除く新規・継続の総計)と研究成果公開促進費を対比してみると図表⑦のようになる。

まず⑥からみていくと、この約二十年間のあいだに科研費全体が約三・二倍、研究成果公開促進費が三・六倍になっている。伸び率では科研費全体より研究成果公開促進費のほうが若干たかく、国の政策自体が、研究成果の普及に力を入れていることがうかがえる。しかも、その力点の置き方には明らかに差があり、データベース等の電子情報による成果公開にかなりシフトしてきていることは、大いに注目すべきであろう。伝統的なペーパーによる単行学術図書への助成も依然堅調ではあるが、長期的にみれば相対的な伸び率の低下は否めない。われわれの主たる事業である「学術図書」が、近い将来に大きな変革期に突入することをこれらの数値は予言しているかのようである。

科研費出版助成のなかの大学出版部

では、われわれ大学出版部の学術図書の助成出版は、科研費出版助成のなかでどのようなポジションにあるのだろうか。その大まかの指標として、採択件数のシェアと採択率をみてみよう。採択件数は、十年前の平成三年度が一六四件中二一件で一・二・八%、同八年度が三四一件中四一件

で二一・〇%、同十二年度が三五八件中四九件で一三・七%を記録している、ほぼこの十年間では一二〜一三%台を維持していることがわかる。十五年前の昭和六十年度が六・七%であったから、大学出版部の科研費出版助成のなかに占める割合は確実に上昇しているといえよう。もちろん、この間に大学出版部の増設ということもあったので、個々の大学出版部の力量が高まった結果であるとはかりはいえない。むしろ、虚心に、大学というわが国の最有力研究機関を母体とする出版部としては、一般的にはまだまだこの程度に低迷しているという印象すら与える現状ではないだろうか。

もうひとつの指標である採択率については、先のアンケートの結果、全国平均との比較ができる。近四カ年しかデータがないが、平成九年度七〇・一%（全国平均六五・八%）、同十年度六六・三%（同五八・一%）、同十一年度六四・一%（同五〇・九%）、同十二年度五七・七%（同五三・八%）と、いずれの年度も大学出版部のほうが全国平均の採択率を上まわっているのである。最低で三・九ポイント、最高で一三・二ポイントの差である。これは明らかに誇るに足る数値だといえよう。(1)大学出版部が申請した原稿（研究成果）のほうが、総じて他のものより多くの割合で審査をパスした、(2)より良質の原稿を提出し、それを学術図書として公開刊行できたということの証明である。この二つの結果は、ある意味で、現在の大学出版部の学術

出版におけるポジショニングを明瞭に示していると思われる。ひとつは量的にはまだまだ大学出版部はわが国の学術出版の中心にはなっていないこと、しかし一方では、質的にはいちおうの合格点がつけられそうなこと、この二点において。

助成出版と大学出版部の経営

ところで、助成出版はほとんどの大学出版部で実施されているが、その割合はどの程度のものであろうか。つぎに、ここで大学出版部経営という視点から、助成出版の規模についてふれてみたい。先ごろのアンケートでは、協会所属二六大学出版部中回答のあったのが二三大学であるが、助成出版をおこなっているのがほぼ九割の二〇大学であった。これらのうち、出版助成金額が総売上げのなかで占める割合を調査したところ、約半数の九校が一〇%未満であった。これらの大学出版部では、出版助成そのものはあまり経営を左右していないといえる。その一方で、四校が二〇%を超えるという回答をよせている（いずれも近四カ年平均）。このグループにとっては、助成出版の多寡がストリートに経営に影響をおよぼしていると思われる。しかも、いずれもが学術図書中心で新刊の発行点数も二〇〜四〇点の中堅出版部といったところで、大学出版部の一典型をなしている。それらの経営が、言葉は悪いが、助成出版に依存せざるをえないこの実状は、わが国の大学出版部のあり

方を象徴しているともいえよう。

さて、助成出版のなかで、では、科研費出版助成はどの程度の比率を占めるのだろうか。そもそも、科研費出版助成をうけた経験のある大学出版部は二三大学中二三大学で、約六割である。この数字はけっして大きいものではない。

しかし、助成出版全体に占める科研費出版助成の割合が四割を超える大学出版部は六大学ある。これらの大学出版部は、ほぼ継続的に科研費出版助成にトライしているいわば常連である。先に科研費出版助成の大学出版部シェアを示したが、この大半がこれらの常連で占めていたのである。その意味では、常連以外の大学出版部にまだまだチャレンジする余地が残されているといえる。

科研費出版助成へのさらなる挑戦を

科研費出版助成を中心に、われわれ大学出版部の助成出版の現状をごく大雑把にみてきたが、最後に若干の提言を試みてみたい。

この稿ではあまりふれなかったが、まず採択率と充足率（申請額に対する交付決定額の割合）の関係について。これは、ご承知のように当事者であるわれわれにとって最大の関心事で、毎年度一喜一憂させられている「成績表」であるが、この変動が激しいのである。平成十二年度、十三年度は採択率が低く（厳しく）五〇％超程度、充足率が六〇〜七〇％と高くなる傾向をみせているが、これが定着す

るかどうか。この二十年間の推移では、二〜三年周期で門戸（採択率）を広くしたり狭くしたりのジグザク状態をくりかえしているが、その政策的意図が不明のままである。狭く、バーを高くするならするで一貫性がほしい。当局者に強くこの点を要望しておきたい。

対するわれわれには、研究者の最も身近な存在として、改めてその成果公開（科研費による助成出版）にさらに一段の積極的取組みが求められるだろう。二〜一三％のシェアというのは、学術出版の大学出版部の一指標としてはいかにも低い。あと五ポイント程度の上乗せが必要ではないか。もとより、各大学出版部の出自や独自の方針によって教養書、教科書等に特化しておられるところは別として、学術出版に関するかぎり、一般的には大学出版部に対する社会的認知、期待はもう少し上のところにあるのではなからうか。科研費出版助成の未経験校が一〇校もあるのは、いかにも淋しいかぎりである。幸い、今回のアンケートでは、こうした未経験出版部から今後は積極的に対応したいという意見が出されている。大いに期待したい。いずれにせよ、この課題に応えるには、いかに密に研究者と接しうるかということであろう。それにより、研究成果の第一次情報はいかに素早くキャッチするであろう。そのためには、結局われわれの組織基盤の強化というところに行き着くが、これはまた、おのずから新たな問題を提起する。今回は、この点を示唆するだけにとどめて、この稿をとじたい。

動物の速さ

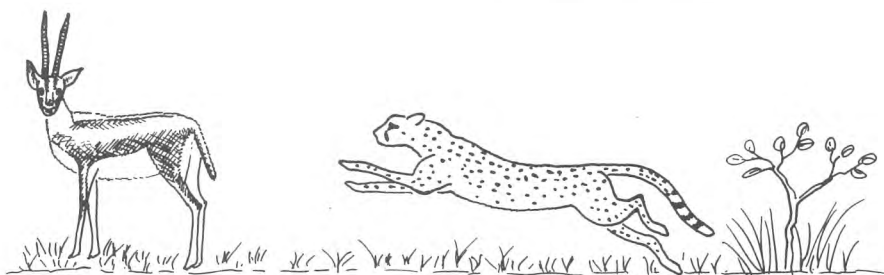
青木淳一

この地球上で一番速く走る動物はチーターだといわれる。時速一一〇〜一三〇キロメートルは出せるということだから、同じ草原にすむ時速九〇キロメートルのガゼルのなかまを追いかけて掴まえることができる。ヒグマは時速五〇キロメートルで走るといふから、一〇〇メートルを一〇秒ちょうどで走る選手でも、時速に直すと三六キロメートルだから、ヒグマから逃げおおせることはできない。ヒグマに追いかけてられたら、残念ながら諦めるしかない。しかし、時速六五キロメートルの猟犬は時速八〇キロメートルで走るノウサギを掴まえることはできない。だから、猟犬はノウサギを追い出して猟師に撃たせるだけの役目に止まっているのである。

ウサギが出たついでに、ウサギとカメの駆けくらべの話を考えてみよう。ウサギはカメを馬鹿にして途中で昼寝をしてしまったために、カメに先を越されてしまうのだが、ウサギはいつたいどのくらいの時間、昼寝をしたのだろうか。ちょっと計算してみよう。ウサギの速力が時速六五キロメートルに対し、カメは時速〇・五キロメートル、「向こうの山のふもと」まで一キロメートルだったとしよう。ウサギが全速力で走れば、たった一分で行ける距離である。カメの速さでは二時間かかる。ということは、ウサギは二時間以上昼寝をしてしまったことになる。

空を飛ぶ鳥の速さは、どのくらいだろうか。特急列車の名前にも使われたツバメは最高時速二八〇キロメートルを越えるというから、時速二〇〇キロメートルで走る新幹線を追い越すことだってできるのである。同じく特急列車の名前になったカモメは速そうであるが、時速四八キロメートルで、カラスよりも遅い。

ただし、以上に示した速度はそれぞれの動物の瞬間的な最高速度であらうから、どのくらい長い時間速く走り続けられるかは、別問題である。アフリカの大草原でチーターが狩りをする場面をテレビでよく見るが、チーターはけっして遠くか



ガゼルに飛びかかるチーター

ら追いかけて、獲物に気づかれないように、できるかぎり近づいてから飛び出す。つまり短距離でのスピードに自信はあっても、その速度を長距離持続させる自信がないのである。だから、狩りが成功する場合も失敗する場合もある。その辺の確率が微妙で、捕食者と被食者の走る速度や持久力のバランスがちようど良いところに設定されているがために、両方が共に生き続けることができるようになっているのだと思う。

動物は全速力で走っているときでも、樹木にぶつかったり、崖から落ちたりはしない。どんなに速く走っていても、障害物を避けたり、方向転換したり、急停止したりする反射神経が働く範囲内で走っているからである。もし、最高時速七〇キロメートルで走れるシカに特別な薬物かなにかを与えて、その倍の一四〇キロメートルで走らせたとしたら、おそらくそのシカは樹木に激突して死ぬだろうと思う。つまり、シカはそんなに速く走れる動物ではないので、それに対応した反射神経を持っていないからである。

さて、人間はどうであろうか。ヒトが自分で走ることができる最高速度は時速三六キロメートル（一〇〇メートル一〇秒として）であるが、自動車に乗れば時速一〇〇キロメートルでも走れる。しかし、現れた障害物を咄嗟に避ける反射神経は最高時速三六キロメートルに見合うようにしか設定されていない。肉体的に自分が出せる最高時速の三倍ものスピードで移動して、事故を起こさないほうが不思議である。多発する交通事故の根源は、実はこのようなところにあるのだというのを、考えなければならぬのではないだろうか。

（神奈川県立生命の星・地球博物館館長）

上海 「大韓民国臨時政府旧址」 博物館



中央の看板がある「石庫門」が博物館の入口。事務所や売店は一番奥の家にある

さる九月、中国・上海市で日韓中の大学出版部協会による「第五回合同セミナー」が行われた。今回の本欄でも番外編的に、上海のある博物館をご紹介します。観光客必見の上海博物館からは徒歩でも十五分ほど、旧租界時代そのままの街角に、この「大韓民国臨時政府旧址」博物館はある。「大韓民国」つまり現在の韓国政府の源流は、ここ上海で八十余年前、日本官憲の追及を恐れ故国を離れた朝鮮の民族運動家により誕生した。一九一九年、当時日本支配下の朝鮮全土で起こった三一独立運動が、力で鎮圧されつつあった頃のことだ。

「臨時政府」とはいうものの、実態は亡命者のアジトのようなもので、「閣僚」たちは、危険が迫るたびに上海市内数カ所を転々とした。すぐ北は日本の官憲もいる共同租界であり、世界各国の各種（主義者）の隠れ家フランス租界も、必ずしも安住の地ではなかったのだ。現在博物館として公開されているここは、場所が特定できて当時の建物も残る唯一の場所である。

当時の普通の労働者向け（大抵は中国人が住んでいた）住宅だったここには、一九二六年から三二年まで、当時の首班・金九以下数名の政府構成員が、新聞を発行したり、朝鮮本土の地下運動と連絡をとったりしていた。三三年、上海北部・日本人居住区の虹口公園（現・魯迅公園）で爆弾テロを執行し上海にもいられなくなった彼らは、以後中国各地を転々とする。朝鮮本土との切断、台頭する社会主義勢力、内紛に悩みながら、四五年の日本敗戦を迎える。「日本の朝鮮支配を覆したのは自分らではなかった」と涙した彼らは、同年一月に政府を解散して帰国。しかし、南北に分断された祖国の南半分で、四八年米軍政下に成立した政府は、この大韓民国臨時政府の正統性を引き継ぐもののように「大韓民国」を名乗る。臨時政府の初代総理事李承晩が、大韓民国の初代大統領に就任した。

前置きが長くなったが、博物館に入ろう。同じような煉瓦造の長屋が延々となぶ一角に看板が出ているが、外見は普通の民家なので入るのに少し躊躇する。

所在地 中国上海市馬当路306弄4号
 地下鉄一号线「黄坡南路」駅から徒歩5～6分
 ショッピング街である「滙海中路」の通りから至近。
 売店で、パンフレット（10元・韓国語）などのほか、
 書籍、「独立精神」置物、金九筆跡複製、ボールペン、
 バッチなどのオリジナル・グッズが購入できる。

開館時間 午前9時～午後5時
 （月曜日は12時30分～5時）

休館日 原則として年中無休

入館料 20元（約300円）



入場券には、金九の肖像入り「独立精神」団扇がついてくる。右のような歴史についてのビデオを見せられた後、案内人が付きっきりで館内を回ってくれる。ビデオ・解説ともに韓国語のみ。私には、ソウルに留学したことがあるという二代の中国人女性がついてくれた。彼女によると一日に二〇〇人以上の入館者があるというが、ほとんど韓国人で、日本人・中国人ともにまじらないらしい。

解説といっても「ここが台所」「会議室」ぐらいの簡単なもので、私が日本人なので何か遠慮をしているのかと思ったが、そうでもないらしい。要するに一時潜伏したアジトに当時のしつらえを復元しただけなので、別に当時のなにかが残っているわけではないのだ。むしろここは、上海を訪れる韓国人が自国の歴史をしのぶ聖地としてある。ひっきりなしにミニバスが乗り付けられ、韓国人が「金九ボールペン」や「特製太極旗ピンバッチ」を買って慌ただしく去ってゆく。

また、ここは中韓接近の象徴でもある。この博物館も昔からあったわけではなく、両国が国交を樹立したのち、地元区政府と韓国政府が、韓国財閥の支援を受けて九三年に開館したものである。受付で身分証明証（日本人はパスポート）の番号が控えられるのは、〈北〉の訪問者をチェックしているのだろうか？

展示があまりに韓国人向け過ぎるのが残念だが、地元の人々が暮らす戦前からの街並みに足を踏み入れ、「石庫門」造りの民家内部を見学できるだけでも、十分魅力ある博物館である。すぐ近所の「中国共産党第一回党大会址」博物館参観とあわせ、戦前この街に胚胎していた抗日闘争のネットワークの現場に思いを馳せるのもいいし、これもすぐ近所の、租界時代の建物を改装したお洒落なショッピングモールのスターバックスに坐って超近代的な新築ビルをながめ、今度は「グローバル化」という名前でこの街を訪れた資本主義のことを考えるのもいい。そのとき、歴史上にも現在にも、日本という国の影がぼんやりと、しかし、ひしひしと感じられてくる。

（東京大学出版会 後藤健介）

大学出版部ニュース

▼上海にて三カ国セミナー開催

第五回日本・韓国・中国大学出版部協会合同セミナーは二〇〇一年九月五日、上海外国語大学において開催された。参加者は日本が一〇大学一四名、韓国が一九大学二十七名、中国が五一大学五五名であり、形式・主題ともに昨年を継承するセミナーとなった。

三カ国代表の挨拶に続き、午前の全体会では「組版におけるコンピュータ導入と出版界の対応」（法政大学出版局・秋田公土）、「インターネット出版の発展についての分析」（北大方正電子有限公司・周勁ネット伝播事業部部长）など六つの講演が行われ、午後は「インターネット出版と伝統出版」「インターネット出版の市場と技術」「出版の営業戦略と市場」の三つの分科会が開催された。

分科会終了後、再び全体会報告に戻り「大学出版部協会ウェブサイトの開設の経緯と現状」（聖学院大学出版会・山本俊明）、「Web出版の未来像」（韓国航空大学校出版部・尹錫達）など四本の講演が行われた。秋田氏のメッセージ性に富んだ講演、

山本氏の協会ウェブサイトを紹介した講演は、いずれも大学出版におけるインターネット出版の現状と課題そして将来展望をまとめたものであり、次回の第六回三カ国セミナー（二〇〇二年八月、於韓国ソウル市、主題は「出版環境の変化とその対応」）に継承されるものであろう。

大学改革、Ebook、オンライン販売、再販制の弾力運用など大学出版をとりまく環境は大きく変化している。来年の三カ国セミナーは白熱した議論が期待できる。



セミナー終了後の晚餐会で渡辺、彭、安の日・中・韓三代表（左より）

▼仙台にて夏季研修会開催

大学出版部協会夏季研修会が八月二三日、サンピア仙台において開催され、二二校六七名が参加した（当番校／明星大学出版部）。

初日は、久道茂氏（東北大学出版会理事長）の特別講演会に始まり、懇親会にも東北大学出版会から六名が出席するなど、地元としての熱心な参加意識をアピールした。

二日目午前中は編集、営業、刊行助成の各部会を開催。編集部会は「仙台メディアアタック」へ出かけ、地元・針生印刷の針生英一社長の講演を聞いた。

午後からは第五回三カ国セミナーにおける日本側発表者三名がそれぞれプレゼンテーションを行い、活発な質疑が交わされた。

最後に渡辺幹事長が二日間わたる夏季研修会を総括。地方会員校の所在地で開催された研修会が、東北大学出版会の非常に熱心な参加意識のもと、今までに増して活発な夏季研修会であったと思つ、東北大学出版会の各位に心から感謝申し上げる、と締めくくった。

北海道大学図書刊行会

▼松本源太郎著『経済のサービスタ化と産業政策』（A5判・三五〇〇円）サービスタ化の進展に伴うわが国の産業構造・就業構造の変化をイギリスと比較しながら、産業連関分析、産職マトリックスなどを駆使して詳細に分析。▼山根爽一著『アシナガバチ一億年のドラマ——カリバチの社会はいかに進化したか』（四六判・二八〇〇円）日本をはじめ、東南アジア、オーストラリア、ブラジルなどにおける広範な調査に最新の視点を取り入れて、カリバチにおける社会進化の道筋を解説。諸学説に著者の見解を対置しながら、その謎に迫る。▼金子 務・山口裕文編著『照葉樹林文化論の現代的展開』（A5判・八五〇〇円）自然・倫理・農業・文化の四つの観点に基づき、新展開を展望する二四篇を収録。研究書ではあるが一般読者にも幅広くお薦めできる一冊。▼石塚喜明著『生命を支える農業——日本の食糧問題への提言』（四六判・一六〇〇円）七〇年にわたり農学研究に携わってきた碩学が、日本農業の未来を憂いて語りかける農業の使命と本質。農業に関わる人々と消費者に読んでほしい一冊。

聖学院大学出版会

▼金子晴勇著『近代人の宿命とキリスト教——世俗化の人間学的考察』（四六判上製・三〇〇〇円）ヨーロッパ近代、しかもプロテスタントイズムの影響の強い地域において起きている「世俗化」という現象は、理性の自律を実現し、呪術からの解放という積極的意味をもたらした。しかし、同時に人間存在に不可欠な宗教性の喪失をきたし、現代人に宗教に対する無理解、無関心を生じさせた。本書では、近代社会における宗教の衰退、あるいは宗教の個人化という「世俗化」現象を分析的に吟味し、また現代の諸科学における「世俗化」の理解をとりあげながら、人間学的な観点から「世俗化」現象を考察する。宗教社会学・諸科学では欠落させてしまう人間の霊性に考察の光をあて、現代において人間の精神を回復させる宗教の意味を論じる。著者は、現在、聖学院大学大学院副大学院長、アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科教授。『ルターの人間学』『アウグスティヌスの人間学』などの著書がある。

麗澤大学出版会

▼中村元著『中村元「仏教の真髓」を語る』（二〇〇〇円）本書は比較思想的視点から仏教の核心にある人間観、宇宙観を語り、それに基づく仏教的倫理と意義ある人生の在り方を説いたものである。釈迦は「人間は無限の過去からの無限の因縁によってできており、いかなる人間も他人をもって代えることのできない尊い存在である」と説く。華嚴経ではそれを敷衍して「宇宙の一切の存在と現象は相互に連関している」と喝破した。現代科学を先取りした見事な宇宙観である。著者はこうした生命感・宇宙観に基づき「我われは己のためのみならず、他のもの（後世の人、環境も含む）にも配慮しつつ生きるべきだ」という共生と慈悲の思想を導き出す。抹香臭さの微塵もない、現代世界を救う思想がここにある。



『中村元「仏教の真髓」を語る』 1,000円
四六判・並製・160頁

慶應義塾大学出版会

- ▼『青年 小泉信三の日記』(二三八〇〇円)
近・現代を代表する「日本の知性」小泉信三の若き日の日記、初の公刊。学問と文芸・演劇に傾倒した東京生活と欧州留学生生活が、友情と恋心も織りなしてみずみずしく綴られた、青春日記の白眉。
- ▼竹村真一編『22世紀のグランドデザイン』(二五〇〇円) 東北芸術工科大学大学院公開講座(講師野村万之丞、糸井重里ほか)の記録をまとめたもので、百年千年の単位でものの見方や価値を語る。
- ▼松本二郎・溝口昌子編『色素細胞―機能と発生分化の分子構造から色素性疾患への対応を探る―』(一八〇〇〇円) 基礎・臨床の第一線で活躍する32名の研究者が、最新動向を提示した専門書。
- ▼大友敏明著『信用理論史』(四八八〇〇円) 重商主義期から通貨論争期までの諸学説の対立と論争を、原典に依拠して体系的に叙述した画期的な研究。
- ▼〈慶應義塾大学産業研究所叢書〉石岡克俊著『著作物流通と独占禁止法』(二二〇〇円) 著作物再販制度を中心に独占禁止法との関係を詳解。再販制度の議論に必出の各報告書も資料として収録。

産能大学出版部

- ▼董門冬二著『戦国武将に学ぶ生活術』(二八〇〇円)
現在は、「戦国時代の再来」といわれる。それは、IT革命の進展による経済環境の変化、慢性的な不景気等により、従来の価値社会が崩壊し、特に、日本式経営の再検討が迫られている。そして能力・実績主義の給与体系への変化や、上を乗り越えあるいは勝つという風潮等の社会環境が、戦国時代と似ているからだ。この新戦国時代を、どう乗り切るか。
本書は「同じような時代に生きた戦国武将に学ぶ」という観点から、織田信長、豊臣秀吉、徳川吉宗、毛利元就、武田信玄ら十四人余の名将ごとに、戦国時代をどう生き抜いてきたか、その乗り切り術と生活術を、歴史小説の第一人者である著者が、多くの事例研究から明らかにする。
- ▼藤公房著『戦国武将の戦略と決断』・『戦国武将の攻めと守り』(各二六〇〇円)
▼佐々克明著『戦国参謀その戦略眼』・『信長・秀吉・家康の戦略戦術』(各一六〇〇円)

専修大学出版局

- つい昨年までの百年、すなわち二〇世紀の世界の歴史を考える上で最も大きなトピックの一つに、共産主義の誕生と、東西冷戦構造とその終焉があろう。
奇しくも小出版局より、その冷戦の対極にあった両大国、米国とソビエト・ロシアを取り上げた本が相次いで出た。
おのおの対象とする時代は違いますが、冷戦構造の終焉と、二一世紀の世界を展望する上で、両書は何かの参考となるであろう。一読をお薦めしたい。
- 歴史認識と現代の変化とは、どこかで深くつながっているのではないか。
- ▼藤本一美著『クリントンの時代―1990年代の米国政治』(二二八〇〇円)
▼宮下誠一郎著『ソ連・ロシア、東欧の政治と経済』(二二八〇〇円)



玉川大学出版部



▼鈴木一郎訳『ホラティウス全集』(一五〇〇〇円) 著者はヴェルギリウスと並び称される天性の詩人。素直な感情表現で自然な思いを発露し、ギリシア風の韻律を踏んだ「諷刺詩」「エポドン」「歌集」「百年祭讃歌」「書簡詩」等、多種の詩形を駆使した待望の全集。「詩論」はアリストテレスの「詩学」とともに作詩法の規範として後世の西欧文学に多大の影響を及ぼした。▼鈴木一郎著『ホラティウス 人と作品』(四五〇〇円) 散文のキケロとカエサル、詩文のヴェルギリウスとホラティウスが活躍したラテン文学の黄金時代。新生ローマを喜びと誇りをこめて、ホラティウスは躍動感溢れる瑞々しきで自然な発露を歌う。人生と歴史と世界に対する深い洞察、高い倫理性と真摯な態度を生ききった詩人の生涯。

中央大学出版部



▼田中義典編著『戦後中国国民政府史の研究 一九四五—一九四九』(五〇〇〇円) 抗日戦争の終結から中華人民共和国の成立に至る四年間、中国全体における混乱・破壊と創造・建設の時代相を、勝利者となる中国共産党の側からのみならず、これまで比較的に等閑に付されてきた国民政府の具体的な政策立案・実施過程の実証的な検討を通し明らかにする。

▼武智秀之著『福祉行政学』(三四〇〇円) 行政学の社会福祉への適用という演繹的な方法に限定し、社会福祉学の体系的な教科書というより、政治学、行政学から見た社会福祉行政の分析に主眼をおき、具体的な政策提言よりも、福祉政策をとりまく制度的な枠組みや再編の方向に焦点を当て、福祉行政のリアリティを明らかにする。

東海大学出版会

小会では、国立科学博物館の研究・教育・普及活動等の内容および成果を広く知っていただくために「国立科学博物館叢書」の刊行を始めました。

▼第一巻「日本の博物図譜—十九世紀から現代まで」国立科学博物館編集 (B5判・二八頁・二六〇〇円)

本書は、国立科学博物館企画展「日本の博物図譜 十九世紀から現代まで」に合わせて刊行されました。江戸末期より昭和期までの博物図譜、「本草図譜」、「目八譜」、「グラバー図譜」、「相模湾産後總類図譜」などに記録された日本の動植物を紹介・解説します。

▼第二巻「アンモナイト学—絶滅生物の知・形・美」重田康成著 (B5判・一五〇頁・二〇〇〇円)

二〇〇一年—二月四日より二〇〇二年二月一七日まで国立科学博物館で開催される「化石芸術」に合わせて刊行されたものです。絶滅した生物であるアンモナイトの進化史、生物学および化石採集などを解説します。

続刊として、学芸員のテキスト等も計画されています。

東京大学出版会

▼林良博・佐藤英明編「アニマルサイエンス」[全5巻]完結

各巻三二〇〇円 ①ウマの動物学 ②ウシの動物学 ③イヌの動物学 ④ブタの動物学 ⑤ニワトリの動物学

アニマルサイエンスは、私たちと身近な動物たちの関係について考える科学です。かれらは、産業動物として、あるいはコンパニオンアニマルとして、私たちとともに生きてきました。本シリーズは、私たちとかれらの未来はどうあるべきかについて考えようという試みです。個性あふれる動物観をもつ各巻の著者は、編者たちの熱い議論を経て、対象とする動物たちの全体像を描き上げました。それらは、動物たちとともに生きる私たちの未来に小さな夢を与えてくれるでしょう。



東京電機大学出版局

▼昨年、一昨年の夏場に起こったカリフォルニアの大停電が、各メディアをにぎわせたことは記憶に新しい。これは、他州に先駆け電力自由化に踏み切った同州最大電力会社の経営難による資金不足から、十分な電力調達が行えず、広範囲で計画停電が実施されたためである。これにより一般市民の生活が脅かされ、各方面に多大な被害と影響を与えたことはいうまでもない。▼わが国においては、昨年三月に部分自由化が実施された。三年間にわたる部分自由化の効果を検証し、さらなる自由化を進めるか否かを決定する予定である。技術の開発はもとより、経済の面からも日夜、研究が進められている。▼急成長を遂げるIT産業だけでなく、生活の根底を支える電力について、安定供給のための技術や市場の動向を、関係諸外国の事例を採り入れ解説。技術関係者のみならず、電気事業に携わる経営者にも有用かつ必読の書である。▼『電力自由化と技術開発—三世紀における電気事業の経営効率と供給信頼性の向上を目指して—』横山隆一監修/A5判/四六六頁/七六〇〇円

東京農業大学出版会

△シリーズ・実学の森▼

▼バイカル湖物語—作家ラスプーチンとの対話—原剛著 自然の原点とは？

環境問題を学ぶ入門書。世界一きれいなバイカル湖にバイカルアザラシの死体が浮かぶ。なぜか？ 平成一三年九月刊/B六判一八頁/八〇〇円 ▼憂国の情

に駆られて 小泉武夫著 食は大切だ。うなずくことばかり。幅広い視野から本音で語る痛快エッセイ。平成一三年十月刊/B六判上製一七二頁/一二〇〇円

▼瀬川孝吉 台湾先住民写真真誌—ツォウ篇— 湯浅浩史著 ランを崇める台湾先住民ツォウの伝統と文化を記録した待望の民族写真誌。写真の多くは失われたツォウの習俗、生業、農作物の品種などを

つぶさに伝える貴重な資料。平成一三年七月刊/A四判上製二三五頁/八〇〇円 ▼みどりの環境デザイン—植栽による循環型社会の景観創出—(社)日本植

木協会コンテナ部会編 二一世紀の循環型社会におけるみどりの環境の創出を実践的に論究。理論・普及啓発・技術の各編からなる。平成一三年十月刊/B五判二

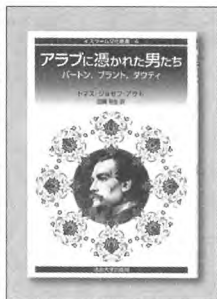
四九頁/二〇〇〇円

四九頁/二〇〇〇円

法政大学出版局

▼さまざまな意味で話題となり、問題となっている「イスラーム」とは何か。その宗教、歴史、地理、民族、文化を根源に遡って究明するシリーズ「イスラーム文化叢書」がスタートしました。

- 1 ペルシアの情景 (G・L・ベル/田隅恒生訳/二三〇〇円)
- 2 スレイマン大帝とその時代 (A・クロー/濱田正美訳/四七〇〇円)
- 3 ムガル帝国の興亡 (A・クロー/岩永博監訳・杉村裕史訳/四七〇〇円)
- 4 アラブに憑かれた男たち (T・J・アサド/田隅恒生訳/三三〇〇円)



▼また、イスラームにおける女性とジェンダー (L・アハメド/林・岡・他訳/四五〇〇円) は、アラブ人自身によるユニークなアラブ女性史です。あわせてお読みいただければ幸いです。

放送大学教育振興会

▼平成十四年三月刊行予定の放送大学印刷教材一〇五点(大学院用六一点、学部用四四点)の編集作業は今たけなわ。主任講師・分担執筆者合わせて約三八〇名、編集担当者約六〇名が、資料収集・原稿執筆、原稿回付・校正にと、大わらわの毎日である。

▼放送大学授業科目別受講者数ランキング(平成十三年度第二学期。カッコ内は受講者概数) 単位百名。外国語を除く)
①心理学入門(37)、②カウンセリング概説(36)、③がんの健康科学(34)、④食物とからだ(33)、⑤人体の構造と機能(33)、⑥発達心理学(32)、⑦人格心理学(30)、⑧乳幼児心理学(30)、⑨児童心理学(29)、⑩老年期の心理と病理(27)、⑪疾病の成立と回復促進(27)、⑫学習の心理学(26)、⑬労働と生活の心理学(26)、⑭病気の成立と仕組み(25)、⑮こころの健康科学(24)、⑯臨床心理学概説(22)、⑰公衆衛生(22)、⑱保健体育(21)、⑲心理学史(21)、⑳家族と生活ストレス(21)、㉑障害者福祉(21)、㉒高齢者の心と身体(21)、㉓地球環境を考える(19)、㉔認知科学(19)、㉕高齢社会の生活設計(19)、㉖地域と食文化(19)

明星大学出版部

▼塚田紘一著『子どもの発達と環境——児童心理学序説』二二〇〇円

近世に至るまで、子どもは「大人の小さい者」と考えられていた。しかしながら、ルソー(Rousseau, J.J.)の子どもを中心にすえた児童観によって児童は研究対象になる。ルソーは『エミール』の中で「子どもは大人と違ったもの」であり、不完全な大人としてではなく、子どもとして理解されなければならない存在である」と提言した。大人はかつて子どもだったために子どもの心をおたかも知り尽くしていると誤解していた。その誤解を解き、児童の心理が科学的に研究され始めたのは、わずか百余年前に過ぎない。それから児童心理学は日進月歩に発達する。本書では児童心理の最新情報を解説。(目次―抜粋) 第一章 発達の基本的理解、第二章 児童研究の方法、第三章 発達初期の展開、第四章 身体と運動機能の発達、第五章 認知発達、第六章 知能と創造性、第七章 情緒・動機、第八章 遊び、第九章 社会性、第十章 自己意識、自己概念、第十一章 親の児童観と教師―生徒間の信頼関係。

早稲田大学出版部

- ▼『世界の福祉―その理念と具体化―』（久塚純一・岡沢憲英編、二一八〇〇円）日本を初め、アメリカ、スウェーデン等先進七か国の福祉の現状を紹介し、グローバル時代の福祉のあり方をさぐる。
- ▼『地方都市再生の戦略―政・産・官・学』の共同声明』（額賀福志郎・小澤一郎・尾島俊雄編著、早大理工総研シリーズ20、二〇〇〇円）都市の個性を活かした街づくりを事例を交えて提案する。
- ▼『数理経済学の新展開―正則経済の理論―』（永田良、五〇〇〇円）二一世紀の経済分析理論として注目を浴びる正則経済理論。その基礎から応用までを解説。
- ▼『教育の復権を求めて』（渡辺重範、二〇〇〇円）歴史教科書問題、学級崩壊など、教育をめぐる課題を検討して、教育の再生と復権の方策を考える。

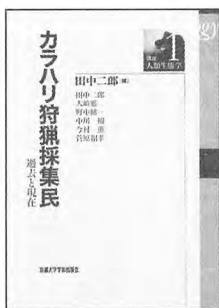


名古屋大学出版会

- ▼石川文康著『良心論―その哲学的試み―』（二八〇〇円）正義論の手前で、われわれの良心のありようを、「共に知る」という言葉の原義から解き明かし、欲望と方位喪失の時代に鋭く問いかけた注目の論考。
- ▼長谷川博隆著『古代ローマの政治と社会』（二五〇〇円）世界帝国の形成は国家ローマそしてローマ人にとって何を意味したのか？共和政期ローマの政治と社会を動かすものを、理念と現実の葛藤の中から捉えた碩学の論集。
- ▼鍋島直樹著『ケインズとカレツキーポスト・ケインズ派経済学の源泉』（五五〇〇円）現代経済学の光に照らして、両者の経済学を理論・思想・政策の三つの側面から総体的に検討し、政治経済学の今日的課題にちえんとした力作。
- ▼J・A・シュンペーター著 八木紀一郎編訳『資本主義は生きのびるか―経済社会学論集―』（四八〇〇円）自らが生きた時代への診断にして、混迷する資本主義の本質に迫る議論を多角的に展開、創造的破壊の世界を、透徹したヴィジョンで語り尽くす刺激的論集。

京都大学学術出版会

- ▼講座・生態人類学（全8巻） 故今西錦司は、人間社会の生物学的構造を説明するといふ壮大な学問テーマを提起し、そのためには、二つの方法、すなわち「人類学的アプローチ」と「霊長類学的アプローチ」が必要であるとした。この提起を受けた人々が発展させたのが、日本が世界に誇るユニークな学問、生態人類学である。「人類学的アプローチ」は、アフリカの狩猟採集民研究がそれをリードし、また「霊長類学的アプローチ」は、サルの状態・社会行動等の解明を通じて、サルから人への移行過程（ホミニゼーション）の研究がその道を開いた。この二つの分野をはじめ、三五年余にわたる研究史の全分野を網羅し、その最新の成果を精密かつ平明な叙述で紹介する。



- 第1回配本・2冊同時刊行
1.『カラハリ狩猟採集民』
8.『ホミニゼーション』

大阪経済法科大学出版部

- ▼『実証の地域史』村川行弘監修 頌寿記念会編／一八五〇〇円／大陸文化と日本をつなぐ弥生文化を中心に、考古学の第一線で研究されてきた村川行弘先生の頌寿記念として本書は企画編集された。第一部は、考古、古代、中世、近世の諸論文であるが、いずれも現在、研究の第一線にあるメンバーが執筆した。第二部は、村川先生との様々な関わりを綴りある方々が記述された。奇しくも、日本考古学史の一側面を語るものとなった。
- ▼『朝鮮中の抗日と大日本帝国の瓦解』北島平一郎著作集 第四巻／九八〇〇円 徳川鎖国主義から一転して、明治政権となるや、朝鮮中への侵略を開始する。第一次世界大戦を境に、中国民族運動の高揚と人権擁立・民族自立の機運がある中、満州かいらい国家をでっち上げ、植民地主義に反省の機会をみていた英仏陣営を離れ、独伊ファシズムと同盟を結び、従来の大連政策をさらに拡大し突き進む。朝鮮中の抗日運動と抗日戦争に逢着し、なすところなく、無理と無謀の中、米國に挑戦して、無数の人命を費やし、國土を焦土と化して、大日本帝国は瓦解する。

大阪大学出版会

- ▼大阪大学創立七〇周年記念出版
「大阪大学新世紀セミナー」全三冊を毎月二冊でこれまでに二〇冊発行した。A5判・九六頁、一〇〇〇円。
- ▼九月刊Ⅱ松川正毅『変貌する現代の家族と法』生まれるとき、暮らす・別れるそして生を終わるとき、家族をとりまく状況の変化に法はいかに対応すべきか。岡田正・小林哲郎・伊藤正『新しい光の科学』電子と光の織りなすミクロの世界を顕微鏡写真や多様な図により解説。
- ▼十月刊Ⅱ福永伸哉『邪馬台国から大和政権へ』聞く銅鐸から見る銅鐸へ、三角縁神獣鏡の製作地、箸墓古墳など興味のある事項を体系的に解説した注目の書。月原富武・酒井宏明『タンパク質の姿形とその働き』Springer（第三世代放射光施設）で明らかになったタンパク質の構造を豊富なCGを使って平易に紹介。
- ▼十一月刊Ⅱ池田寛『学校再生の可能性』地域との協働による教育コミュニティづくりの試み。現代的問題に切り込む。本田武司・生田和良・堀井俊宏『感染症研究のいま』O157やエイズはどこまでわかっているか。以後続刊。

関西大学出版部

- ▼小川 正著『魂なき教育』への挑戦』（二五〇〇円） 今日の教育危機を克服すべく、人間性の回復を求めて、親鸞の自然法爾の思想に基づく「魂の教育」の構築をめざす。三木清氏や高史明氏、灰谷健次郎氏、林竹二氏、福地幸造氏、東井義雄氏らの教育実践を分析する。
- ▼丹羽良治編『ポストコロナル文学の研究』（二八〇〇円） アジア、オセアニア、フランス語圏およびスペイン語圏などのポストコロナル文学を、それぞれ専門家が斬新なアプローチで分析する。ジャンルの多様性ばかりでなく、アプローチもユニークで、ポストコロナル文学の特性を浮き彫りにした一味違った共同研究論文集。
- ▼雨宮俊彦著『相互作用で解く心と社会』（二〇〇〇円） スターログによる複雑系理論の具体的な解説とその思想的含意の検討、社会的相互作用に関するソシオンの理論の簡明な解説、視覚記号の記号論的検討の三部で構成される。環境・エージェント間相互作用として、心と社会をとらえようとする人間社会科学の枠組みが提示されている。

九州大学出版会

▼平成十三年度科研費にちなむ『学術図書』十月から順次刊行。①樗木武編『City Planning in Asia』(翻訳助成)K100円
 ②前園宜彦『統計的推測の漸近理論』H00円、③冢入葉子『Negative Constructions in Middle English』H000円
 ④伊藤益代『Case Marking and Verb Morphology in Early Syntactic Development』H00円、⑤山中光義『The Twilight of the Eighteenth Century Ballad in the Eighteenth Century Japanese』K100円、⑥篠原清昭『中華人民共和国教育法に関する研究』H00円、⑦花田洋一郎『フランス中世都市制度と都市住民』K500円、⑧野村啓介『フランス第二帝制の構造』K500円、⑨鏑木政彦『ヴェルヘルム・ハイムター』H00円、⑩田畑博敏『フレーゲの論理哲学』K100円、⑪青木多寿子『認知発達心理学』H00円、⑫中橋孝博他編『Ancient people in the Jianghuai region, China』K300円、⑬伊藤重剛『Theory and Practice of Site Planning in Classical Sanctuaries』K400円、⑭小川功『企業破綻と金融破綻』H000円、⑮清水靖久『野生の信徒 木下尚江』H100円。

東北大学出版会

▼津田恒之著『牛と日本人』(四六判、三〇〇頁、TUP叢書、一三〇〇円)
 私達日本人にとって牛とはどのような存在だったのか。長年畜産の研究に携わってきた著者が、牛に関する科学的知見を基本として、牛への深い愛情を表しながら、日本人と牛との関わりを、「文化」として解き明かす。

▼山口一良著『高炉を支えた操業技術と原燃料』(A5判、一七〇頁、二〇〇〇円)
 高炉は、総炉高百mにも及ぶ史上最大の反応器である。長引く不況や後進国の激しい追い上げの中で、一億トン近くの良質な鋼を供給し続けて来られたのは、絶え間ない技術革新があったからである。変わりゆく時代の中で、圧倒的な存在感を示す高炉を興味深く、展望する。



流通経済大学出版会

▼(近刊)『産業立地の経済学』F・マツカン/流通経済大学学長 坂下昇訳
 経済学においては比較的最近まで空間というものは、まます扱いされてきました。これは時間の扱われ方と比べると非常にはっきりしております。時間については経済成長論という分野があって、多数の経済学者がこれに専念しておりましたが、空間についての分析というのは、比較的最近にやっと繁栄を迎えているわけです。どうしてそういう扱われ方になったかという、距離とか輸送費とかいうのを明示的に入れますと、分析が非常に複雑になって手に負えなくなる、というのが本当の理由のようです。

一九五〇年代後半になって、距離ないし輸送費を明示的に処理しようということになり、多くの経済学者がこの研究に取り組んでおります。これには二つの方向があり、一つは空間を点と線として扱う考え方でもう一つは空間を面として扱う考え方です。サミュエルソンの『空間的価格均衡の理論』は前者の代表例であり『本書』は後者の立場での優れた業績であります。

三重大学出版会

▼濱森太郎『巡礼記「おくのほそ道」』
四六判二八〇頁、二二〇〇円

アジアの片隅に「礼儀の高等学院」と讃えられる小国があった。この国でいう「文化」は、カルチャー（語源はcultura可耕す）ではなく、文言をもって他人を感化する行為を意味した。その感化を意図して諸国を巡礼する俳諧師の一人として奥羽巡礼の道すがら、亭主の心に残る詩句を献呈するところから、松尾芭蕉作巡礼記『おくのほそ道』が始まる。

- 以下に目次掲げる。
- 序 蕪村の慧眼―『おくのほそ道』の方法
 - 第1章 『おくのほそ道』 訳詞篇
 - 第2章 1 礼儀の高等学院の旅
2 『おくのほそ道』の口述手法
 - 第3章 1 風羅坊、恋の細道
2 風羅坊、伝説の細道
3 案内者の心性
 - 第4章 1 風羅坊、風儀の細道
2 風羅坊、北陸道の無情
3 絶景に向かうとき
4 大団円の構図
 - 第5章 まとめ

関西学院大学出版会

『ダイアログ型講義録』創刊！

授業での学生の反応、質問や意見をフールドバックし、その結果を盛り込んだ実践的講義録シリーズです。

ダイアログ型講義録

▼宮原浩二郎著『自分のためのMastery for Service!』

(A5並製・一一八頁・一六〇〇円)

▼福井幸男著『株式会社はこんなにもおもしろい』

(A5並製・一八四頁・二二〇〇円)

▼阿部潔・石田淳著『ダイアログで学ぶ基礎社会学』

(A5並製・一四五頁・予価二二〇〇円)

以後続刊予定。

▼富田宏治著『丸山眞男―「近代主義」の射程』

(A5上製・二四五頁・五〇〇〇円)

▼関西学院大学事典編集委員会編『関西学院事典』

(A5上製・四四三頁・五〇〇〇円)

▼関西学院百十一年の足跡を網羅する。

▼小島達雄著『モリエールと〈状況〉の演劇』

(A5上製・二四五頁・三六〇〇円)

ウェブサイト委員会ニュース <http://www.ajup-net.com/>



〈書籍の表示価格は税別です〉

▼十月から、協会ウェブサイトの特ページがリニューアルされました。

『大学出版』および『新刊速報』の最近四号に直接アクセスできるようになり、また、協会の行事についても、従来以上に詳細な予告・報告、および関連記事を掲載していく予定です。

▼また、本誌前号で予告いたしましたように、渡辺幹事長、山本・市川両副幹事長のメッセージも掲載されています。ぜひ、ご一読下さい。

▼なお、ご意見・ご要望は、mail@ajup-net.com宛にお願いします。

■書店で本を選んでいるときに、あるいは書店に入っただけでも、トイレに行きたくなくなるといいう人は結構多いらしい。どこかの雑誌はこの大問題(?)について特集を組んでいたほどである。

■実は僕もそうだ。しかも僕の場合、書店はもちろんだが、必ずしも書店には限らない。とりわけ腹の具合が悪いわけでもないのに、腸が突然に蠕動をはじめめることは珍しくない。

■九月上旬に、「日本・韓国・中国 大学出版部協会合同セミナー」で上海に行つたときもそうだった。ファストフードの店に入り、トイレ(廁所)を貸してくれないらしい。同行のO君が、「駅の近くに有料トイレがあつたはずだ」というので、駅に向かう。情報は過たず、確かにトイレは存在した。しかも有料だけに、噂に聞く中国のトイレ事情とは異なり、清潔感のある建物なのでホッとす。

■中に入ると立派なカウンターがある。その奥には制服制帽の係官が二人、いかめしい顔つき

で座っている。料金はわからぬものの、とりあえず一元硬貨を出す。すると、係官が何やら大声で問いかけてきた。もちろん中国語はわからない。しかし事情が事情だけに必死になつて聞き取ると、どうやら「貴君が催シタルハ大ナリヤ小ナリヤ」ということらしいのである。

■いささか恥ずかしいが、「我ハ大ヲセント欲ス」と答えた。すると係官はおもむろにうなずき、手を差し出してきた。手の上にはトイレレットペーパー。三つ折り一五センチ、すなわち全長四五センチである。どのような腹の状況であつても、これで

まかなえということなのであるうか。もし失敗したら、それこそ「運の尽き」ではないか!

■なるほど、個室にはトイレレットペーパーは装備されていなかった。後で聞いたところによれば、大は一元(一五円)、小は五角(七五〇銭)なので、係官としては紙を渡すかお釣りを渡すかで、何としても大小を明確にする必要があつたのだ。

■用を済ませて気分が落ち着くと同時に、この国の紙事情について考えさせられた。書籍や雑誌の紙質が悪いことには以前から気づいていたが、どうやら紙資源の不足は、僕が考えていた以上に深刻なのだろう。

■今回の三方国セミナーのテーマは「インターネットと伝統的出版」であつたが、日本側参加者の多くが、インターネット出版に対する中国の突出した熱意を感じ取っている。そして、その理由として紙資源の問題と大きな国土における輸送の問題を挙げている(その点についてはセミナーの報告集「SHENGCHI 2001, TRIANGLE ADVENTURE」を

ご参照いただきたい)。

■考えてみれば、物価は日本の一〇分の一、給与水準にはそれ以上の開きがある国で、森林資源が不足しているからといって、高価な輸入紙をふんだんに使うなどということができるわけもない。ましてや中国の大学出版社が発行する教科書の部数は日本とは桁違いに多い。日本では組版代がネックとなるが、中国(特に教科書)の場合は現在でも、用紙代が原価の相当部分を占めているに違いない。

■よそ事ではないのだ。APERCのホスト国となり、この原稿を書いている今日、WTO(世界貿易機関)にも加盟した中国がこのまま経済発展を続け、しかもインターネット出版に対する熱意が実を結ぶことなく熱意だけに終わり、紙の使用量が急増したならば、紙資源の問題は中国のみならず、「日本の」、そして「全世界の」問題となるだろう。「紙の本は永久に不滅です」などと言つていられなくなるのは、必ずしも遠い将来ではないのかも知れない。(廁童子)



上海のトイレで 考えた...

製作の現場から [26]

デジタルカメラって何？

■今どき、メールといったらメール（イーメール）のことである。若い人に「メールちょうだい」と言われてせつせと手紙を書く人は、おじさんにもいない。郵便のメールのことは、タートルメールとかスネークメールと言うそうである（亀や蛇のように遅いの意味）。

■メールがビジネスで使われるようになって、もともと持っていた自由な雰囲気も少々崩れてきたが、それでも拝啓にはじまる手紙の形式性や敬語といった約束事抜きに、フランクでシンプルな要件重視の文章が好まれている。使い始めた頃、上司の依頼にも「了解」とだけ返しておける機能が魅力的だった。手紙、電話、ファックスとは一線を画すeメールに、ネット文化がもたらす変化を実感した。

■一〇年以上昔、「電子出版はこれから出版社の重要な活動となり、わざわざ電子と断る区別がなくなる」と吹聴してまわっていた。メールの方が先にeである限定から解放されてしまっただが、最近では、「紙の本」と



言わないと話が進まない時がままある。

■言葉には流行廃れ（はやりすたれ）があり、なかには用語の定義が本来の意味からゆつくりと離れていき、気づかないうちですっかり装いを新たにしてみまうこともある。新語や死語となつてしまえばよいが定義が揺れているときは、その扱いが議論のもとである。最近、デジタル出版に関連する用語について検討する機会があった。

■たとえば「活字」である。当然、活版印刷に使う鉛を主とした物理的な存在をいう。それだけならデジタル出版とは縁がな

いのだが、「写植やDTPによる印刷した文字は何というの」となると、やはり活字だろうか。抵抗ある人もいるだろうが、手書き文字に対して活字とするのが自然な流れである。「活字文化」といっても活版印刷物は、もはやないのだから。

■一方、外来語では用語の表記自体が揺れることになる。たとえば「デジタル」か「デジタル」か、皆さんは普段どちらを使うだろうか。専門家でもない限り「デジタル」だろう。電気製品の広告や新聞・雑誌を見ても圧倒的に「デジタル」である。手元の辞書を調べてみると、一部のパソコン用語集では「デジタル」もあるが、『広辞苑・第五版』をはじめ、多くの国語辞書は「デジタル」である。ちなみに、『広辞苑・第三版』では「デジタル」を採用している。表記が変化してきたよい例である。

■これに関して平成三年に『外来語表記に関する内閣告示』がある。それによると「デイ」は、外来音デイに対応する仮名であ

る、とあり、さらに注では「デ」と書く慣用のある場合はそれによる、とある。「デジタル」は間違いなく慣用であり、まずは問題ないと、ふつうは考える。

■一方、専門家が集まって決めた『学術用語集・電気工学編』では「デジタル」である。一般に「デジタル」という用語が定着する以前から、電気工学の専門家の間では「デジタル」が用語として使われてきている。今や世間では通用しない村言葉である。平成三年以前では、昭和二九年の国語審議会報告『外来語の表記について』が有効で、この中では原音に近い「デイ」の表記を優先していた節がある。■ところが検定教科書では『学術用語集』をより所としている。この結果どうなるか。平成一五年度から普通高校で「情報」が必修教科となる。その教科書が検定審査の真つ最中であるが、「デジタル」が採用されている。高校生諸君も面食うらだろう。何しろ「デジタルカメラ」である。誰も「デジタル」とは言わない。（デジタル出版派）

大学出版部協会加盟出版部一覽

北海道大学図書刊行会

060-0809 札幌市北区北9条西8丁目 北海道大学構内
TEL 011-747-2308 FAX 011-736-8605

聖学院大学出版会

362-8585 上尾市戸崎 1-1
TEL 048-725-9801 FAX 048-725-0324

麗澤大学出版会

277-8686 柏市光ヶ丘 2-1-1
TEL 0471-73-3331 FAX 0471-73-3154

慶應義塾大学出版会

108-8346 港区三田 2-19-30
TEL 03-3451-6926 FAX 03-3454-7029

産能大学出版部

152-0035 目黒区自由が丘 2-16-5 自由が丘昭和ビル
TEL 03-3724-9101 FAX 03-5701-7499

専修大学出版局

101-0051 千代田区神田神保町 3-8-3 専修大学 4 号館
TEL 03-3263-4230 FAX 03-3263-4288

玉川大学出版部

194-8610 町田市玉川学園 6-1-1
TEL 042-739-8935 FAX 042-739-8940

中央大学出版部

192-0393 八王子市東中野 742-1
TEL 0426-74-2351 FAX 0426-74-2354

東海大学出版会

151-0063 渋谷区富ヶ谷 2-28-4 東海大学校舎内
TEL 03-5478-0891 FAX 03-5478-0870

東京大学出版会

113-8654 文京区本郷 7-3-1 東京大学構内
TEL 03-3811-8814 FAX 03-3812-6958

東京電機大学出版局

101-8457 千代田区神田錦町 2-2
TEL 03-5280-3433 FAX 03-5280-3563

東京農業大学出版会

156-8502 世田谷区糞丘 1-1-1
TEL 03-5477-2562 FAX 03-5477-2643

法政大学出版局

102-0073 千代田区九段北 3-2-7
TEL 03-5214-5540 FAX 03-5214-5542

放送大学教育振興会

105-0001 港区虎ノ門 1-14-1 郵政互助会琴平ビル 3 F
TEL 03-3502-2750 FAX 03-3592-2482

明星大学出版部

191-8506 日野市程久保 2-1-1
TEL 042-591-9979 FAX 042-593-0192

早稲田大学出版部

169-0071 新宿区戸塚町 1-103
TEL 03-3203-1551 FAX 03-3207-0406

名古屋大学出版会

464-0814 名古屋市千種区不老町 1 名古屋大学構内
TEL 052-781-5027 FAX 052-781-0697

京都大学学術出版会

606-8305 京都市左京区吉田河原町 15-9 京大会館内
TEL 075-781-6182 FAX 075-761-6190

大阪経済法科大学出版部

581-8511 八尾市楽音寺 6-10
TEL 0729-41-8211 FAX 0729-41-9979

大阪大学出版会

565-0871 吹田市山田丘 1-1 大阪大学事務局内
TEL 06-6877-1614 FAX 06-6877-1614

関西大学出版部

564-8680 吹田市山手町 3-3-35
TEL 06-6368-1121 FAX 06-6389-5162

九州大学出版会

812-0053 福岡市東区箱崎 7-1-146 九州大学構内
TEL 092-641-0515 FAX 092-641-0172

東北大学出版会 (準会員)

980-8577 仙台市青葉区片平 2-1-1 東北大学構内
TEL 022-214-2777 FAX 022-225-2029

流通経済大学出版会 (準会員)

301-8555 龍ヶ崎市平畑 120
TEL 0297-64-0001 FAX 0297-64-0011

三重大学出版会 (準会員)

514-8507 津市上浜町 1515 三重大学出版ホール内
TEL 059-232-1356 FAX 059-232-1356

関西学院大学出版会 (準会員)

662-0891 西宮市上ヶ原一番町 1-155
TEL 0798-53-5233 (内線 3475) FAX 0798-53-9592